

季題寸言·批評·主張



〔季題寸言〕

(大正6年・曲水2―1)

干 菜

ぢき近くの寺の裏にある市設の狂人隔離舎の傍を通ると、この前夏通った時には青葉の奥の田舎見たような中で若い女の叫び声がしてゐたが、もう何処かへ行って仕舞つたとみえて壊れかゝつた座敷牢の太格子には干菜が吊してあつた。

枯 野

暮色がこめて枯野の真中に立つた青年の眼には遠い町の灯が悲しく見えだした。町を出た西行の汽車が轟々と青年の前を過ぎたとき、青年は思はずオーイと叫んだ。オーイ………汽車からも誰か応へた。

烏 瓜

川沿ひの竹垣根二十間ばかりへ、行人を驚かすばかりに烏瓜が一面に生つた。竹のためには悪いと思つたが、冬枯の頃赤らむのを樂しみに其俣にして、父に芙蓉山房を烏瓜庵と改名しようなどと話してゐるうち、川狩に来る子供等がいつのまにか滅茶く／＼にむしつて行って仕舞つた。

粟

「俺らけえ」と逞しい汚れた顔の労働者が叫んだ。巡査はしきり

に手帳をひねくり廻す。何か始まるなといふ氣が取巻いて立つた人々の顔に見える。粟が来た、郵便夫が一寸覗いてフイと過ぎた。

梅

隣家には今宵お嫁様が来るのだそう、家中が明るく灯つて、梅の門を提灯の出入が忙がしい。

凧 揚 げ

村人の反対したのを金の力で田を買収して出来たある会社の敷地が、急に会社が破産したとかでそのまゝになつて仕舞つて好い草地になつた。この冬は毎日のやうに村の童が集つて凧揚で大騒ぎをしてゐる。

冬 の 夜

毎年冬になると来る辻占売が、今年もある夜更初めて来た。此の辻占売の来た晩はきつと後から盗人が入るといふ噂があるので、一所雨戸の門がきかないのを見出した女達は急に恐がり出して、竹刀やら二尺ざしやら六七本しんだつ棒に持ち出して来て寝た。あとで行つて見ると金剛杖が落ちてあつた。

(大正7年・曲水3―5)

桐 の 花

紫に咲く桐の花を見ると、伴天連の僧達が渡つて来た長崎の海の色が懐しくなる。

季題寸言欄復活に際し

(曲水7-6)

季題寸言は、数年前水巴先生が創めて作り出されたものである。早くからの社友諸君は御存じの事と思ふが、且つて「智仁勇」俳壇には先生初め諸氏の作品が時々発表され、次いで本誌三巻頃再び暫く此の欄を設けた事があつた。それを三度本誌に復活させる事になり担当を自分が托ねられた。自分はもとよりこの適者ではなく、この仕事には、花酔、玩亭、楽堂諸氏の先輩がある。が、敢て自分がこれを引受けたのは、季題寸言に就て、常に愉快なる期待を持つてゐた所以に他ならない。

改めて当欄復興に當つて、大体の処、季題寸言の如何なるものかに就て、充分の説明の必要があらうかとも考へるがさてその場合に立至ると、自分も遺憾ながら季題寸言の果して如何なるものかといふ事に就いては、まだ適確な真髓を掴み得ない。それ程季題寸言は創められてなほ日浅く充分な研究も積まれてゐないのである。思へば季題寸言は爾来不運な境に埋もれがちであつた。

が、また一面には、それだけ今後開拓研究して行くのに、すくなからぬ興味もあり励みもあるのである。我々の進み方によつて、季題寸言は果して如何なる内容を盛り如何なる表現形式を持つて完成されやうか、それは一に未来にある事で、自分は何等の予定も持ちたくない。たゞ自分は日本文芸の一区画によし小さくとも何等かの足跡を確と印づけ得ると信ずる者である。

季題寸言とは、今即座に考へたものではあるが、季題短章であり、また、俳短章と称して、大した誤りはないといつたならば、大体どんなものであらうかといふ事は、諸君の脳裡に想像される事と考へる。

何よりも先に、過去に於いて我々の手になつた作品から、その例を挙げて見やう。何れも前記二期の間に発表されたもの、中からの抜萃である。

椿

煤煙の落ちる上野の崖に椿が咲く。其の下を博覧会の工事に働く大工が幾人も通る。大工は咲いた椿を振仰がうともしない。椿はぼつたりと一つ花を落した。大工はそれを跨いで通つた。大工の小僧はその花を踏みつけて行つた。(玩亭)

海棠

骨壺を提げて火葬場の門を出る時、打ちつけるやうな烈しい風雨の中に海棠が咲いてゐた。(花酔)

躑躅

躑躅を足扁でない字に替へたい。(碧雲居)

同

咲き誇る躑躅の花は生蕃人の兜にい。(水巴)

木蓮

木蓮の花は裸の人が舞扇さつと開いたやうだ。(玩亭)

寒菊

寒菊と。親を尋ねに廻る阿波の鳴門の順礼のおつる。(玩亭)

菜の花

少女の給仕で朝餉をすました。新聞の天気予報と菜の花の田甫を見る。
(比企)

桜

天空に咲く桜があるならば、富士の山頂で落花が踏める。

(水巴)

以上は第一期の作品である。第二期は曲水二巻頃から三四巻頃主に楽堂氏の選で発表されたものである。

麗か

麗かな日を浴びて釣堀で釣糸を垂れてゐる。ふと帯の間から時計を出して見ると、向ふ側に釣つてゐる人も時計を出した。(長頸子)

萩の花

私は雨傘が大好きだ。雨傘には一生贅沢をして見たいと思ふ。去年深蛇の目を買った翌日の雨に兄の控家へ其れをさして出かけた。帰りに頭の上に赤いものが見える。其れはこぼれ萩の二つ三つ。
(つゆ女)

落花

自転車で落花の堤を徐行しながら大口を開いて見た。顔に当る花はあつても口の中へは一片も入らなかつた。
(苔雨)

寒

零下三十幾度の日が二三日続くと凍死者は百を以て数へらる。店の軒、町の角と所嫌はず死体が横はつてゐる。それ等は殆んど阿片溺愛者の果である。
(満州木三)

桜

中学の頃、加奈陀の宣教師の許に居った事がある。夕暮の庭へ出ると、庭の隅で宣教師の幼い娘がたつたひとり、銀の匙で一面に散りしいた桜の花片を掬つて遊んでゐた。傍へ蹲むと、黙つて二ひら三ひら掬つて掌へのせてくれた。
(長頸子)

夏の雨

聽て汽車が森にさしかゝると、雨に一際鮮かな色を増した青葉や其の下にぐんぐ伸びてゐる夏草が窓一杯に迫つて来て、汽車は急に青々した海の底を走つてゐるやうだ。
(蝙蝠)

秋の夜

日が暮れるとすぐ雨戸をしめる。秋の夜の灯は少しも外へ洩らしたくない。
(千葉城)

秋の日

真赤な秋の夕陽が海の方ばかり照らしてゐる。
(碧川子)

秋日

秋の日が直赤になつて沈む時、私は好んで突堤を歩く。沖へ行かれるような気がする。
(千葉城)

氷 水

夜更けて、カリカリ／＼と削る氷の音が、天の川まで響く。

(玩 亭)

蛩

人ならば、古き都のほとりに住むと云ったやうな蛩の姿。

(比 企)

水 中 花

露店の大きな皿の中で、水中花が徐々に咲きひろがった時その花が、パツと四散した。天空から一直線に落下した一粒の水が、皿の水と溶け合ふたのである。大概水天宮様は雨になる。(玩 亭)

右に挙げた例に依つて、多少とも季題寸言の輪廓だけは感じられた事と思ふが、季題寸言は小品文の一節であつてはならない。短い一箇の中に完全した独自性の内容が含まれなければならない。さりとて、勿論俳句を基調としたものではあるが、俳句を引伸したものであるでもない。

前年北原白秋氏が一時試みた短唱といふのがあつたが、これと季題寸言とは、各々似て非なるものであつた。なほ、永井荷風氏が十年ほど前に、たしか三田文学かに、日本の庭と題して書いた花鳥日記見たいなものがあつた。これはかなりこの季題寸言と共通点を見出し得るものである。両者いづれも両氏の著作集中にはある筈であるから、熱心な諸君は就いて見られたい。

兎に角、目下の処では季題寸言は一口にどういふものであるとい

ふ事に断定出来難い処にある。止むなく自分は、時折書きとめて置いた季題寸言の種々相を描いて、別の方面から覚束ない説明を少し試みたい。

○ 「言葉多きは品少し」、季題寸言にもそのまゝ、よく当はまるべき言葉がある。

○ 季題寸言は、一步誤ると見せびらかしになり、作意が見えずいて嫌味になる。鈴木三重吉さんが書く女の言葉のやうに、つゝましくしかも含蓄がなければならぬ。

○ 季題寸言は、番茶の熱く量多きを好まず、藍手の薄き茶碗の底は、油のごとくしたみおとす玉露の眼覚むるばかりの風味をこそ。

○ 季題寸言は、大廈並び建ちアスファルトを敷詰めた大道ではない。寧ろ、影深く静かな露路である。けれどもそこには忍返しをつけた扉かげに、水引の花がすつと覗つてゐたり、思はぬ大川の横顔がチラリと見えたりする。

○ 或る時、我々に異常に情緒を動かされる事がある。が、しかもそれを俳句に盛りきれない場合が間々ある。その時、季題寸言は、何分かの役立になりはしないだらうか。

○ 俳句が一面「暗示」の文芸である如く、季題寸言も「暗示」に反く場合、その香気を弱める。

○ 「海に秋の日が赤々と落ちた」「或日、秋の日が海ばかり赤赤と染めた」。つまらぬ例かもしれぬが、何れが「暗示」に富み、何れが我々の情緒に響かうか。

選 後 に

(曲水 7-12)

季題寸言もこれで四回発表したことになる。投稿もおひ／＼殖えて新らしい人も見えて来たが、まだやうやくに四回では、何か言は

うにも少し早い気がする。しかし今、これだけの事は言へる。予期したよりもい、投稿が見えて来て、少くとも発表したもの、上から推して、季題寸言は将来に於ては、かなりの処に進み得る予感がある。これは大変に喜ばしく思ふところである。

芸術上の事には私は一切妥協をしない。これから有つ季題寸言の選に方つてもさうである。随分数多く作品を見せてくれた人でも一つも抜かなかつた人もある。さういふ人は熱心さが見えるだけに濟まなくは思ふが、感情から抜いて不純な作品が誌上に残ることは、結局作者自身の恥であり、また私の恥である。かういふ恥をさらしてゐる人が世間にはうんざりするほど居る。顔がほてらうではないか。恥を恥と知らない人はそれでい、かも知らないが、私たちはそれを恥とする。

多く抜かれなかつた人には、かういふ私の立場を許して貰はなければならぬ。そして不断に作品を寄せて戴きたい。お正月が来る。新年号には一層い、作品が集まることを期待したい。

「季題寸言」選後

(曲水 8-16)

今月は三月ぶりの発表になります。二月号かぎり私は黙って発表を休んでをりました。発表する心持になれなかつたからでした。そして四月号分五月号分と順に投稿を見ながら、一層私は選び悪くなつたのに気がつきました。敢て投稿が減つたわけではありません。おそらく、木の芽の頃から春へかけて、誰も感ずるやうにしみじみ仕事が出来ない、この気候のせいだったのでせう。さう思つて、気をつけて三月分の投稿を更に見て行くと、果してい、作品に乏しいばかりでなく、一体の調子が、今までに比べてずつと落ちてゐるのに気づかずにはゐられませんでした。

今月発表の分は、三月も休んだ後の三回分の発表にしては、少し情ない成績でした。そして、これが例になく寛選の結果です。しかし、もう気候も定まり多少心も落ちつけませう。今後の投稿を期待します。

この季題寸言に就ても兎角の批評があるやうです。善くもまた悪くも。然し、この選に當つた私は、初めから人知れず考へたり苦しんだりして真地面にやつてをります。投稿者諸君の中にも私同様真剣な意気込が見えてをります。私は微笑しております。まだ初めて六、七回の発表に過ぎません。よしまだ拙くても真地面なのを私はひそかに喜びます。

「誰れ彼れ曰」

(曲水 8-16)

南涯曰——季題寸言といふものは感心しない。あんなものを別に募らなくてもみんなの毎日作つてゐる俳句は即ち悉く季題寸言ではないか。すでに苔雨氏も、「之は句にすればもつと良くなる境地を持つてゐる」など考へられるそうだ。それならば何様「もつと良くなる」句にしないか。それを季題寸言で放つて置くのは俳人として骨惜みではなからうか、又俳句より字数の多いのが季題寸言と思つて、字あまり俳句の様なものを投じてゐるのを毎度見受けるが、そんなのは海紅に沢山い、のが載つてゐる。

* * *

長頸子曰——去年この選を初める前に僕が書いた感想みたいなものを読まれたなら、今こんな批評をされるのは少し意外だが、季題寸言と俳句とは全く違ふ。(中略)：飯を食つても寿司を食つても我々はたんのうする。が、これも全くの別物だ。すべて、そのものは別なものでも後の心持が似てゐるからなのだ。俳句を俳句な

るが故に尊しとする人は何でもかんでも俳句で片付けてしまふ、しまはうとする。一つの花を我々が芸術に創作しやうとする。それを絵としてか、俳句としてか、歌としてか、小説としてか、それは、その折の心持にも依らうが、結局はその人の能力の傾向に依つて、俳句となり絵ともならう。かくして季題寸言も創られる。俳句がいかに季題寸言が劣るか、それを断ずる勇氣を僕は幸にも持たない。

「俳句より字数が多い」云々は、真地面に季題寸言を育て、行かうとしてゐる作者達を怒らせるだらう。誰が字あまり俳句を作る気で投稿したか、さういふのを「毎度見受ける」といはれるが、僕はどれを指されるのか受取りかねる。例をあげて海紅の句と並べて評されたい。海紅はこの四、五年來僕は知らない。よし海紅に沢山い、句があらうと、それで何して季題寸言が悪い事になるか。海紅の句は海紅の句、季題寸言は季題寸言である。作者も選者も真地面に苦しんで育てはじめてゐる処だ。字数や上面の感で簡単に片附けられたくない。僕は現在以上の如く信ずる。
(大正12年)

季題寸言

片脚曲らない男が、月夜の籐椅子で、化物のやうな大南瓜を盗む話をした。たゞそれだけなんだが——。
(南瓜)

ついとろく／＼としたと思つて驚いて眼をさましたら、頭の後ろが痛かった。茶筒を枕にしていたのだつた。何となく肌さむく、膏葉の匂いのなつかしい梅雨の日の午前だ。
(梅雨)

洗ひたてのシートに取換ると、いつも病院がなつかしい。白湯でのむ粉薬、夕暮の庭に咲いた山梔子、午前の看護婦達——。(六月)

「誰れ彼れ曰」

(曲水817)

(此欄大いに投稿を乞ふ。但取捨の権は編集者にあり。又変名の稿は没書とす。)

南崖曰(要約)

再び、感情を交へない純なる芸術論として、私の季題寸言觀を述べる。今かりに、寿司の味は和歌、蕎麦の味を俳句とすると、季題寸言の味も蕎麦である。但し俳句には本場の味があり、寸言は場違ひの味だ。曲水は俳句誌であつて、誌友は作句することとそこに帰依しているのだ。寸言の多少変つた味は俳句で必ず出せる味であり、寸言が抱く内容は必ず俳句に表現できると断言する。俳句に専念しその醍醐味に到達せよと言ふのだ。

左記、海紅の句は、い、句として、はなく、寸言と行き方が同じだと言ふことを示すために抜いた。

●二人が背を見せて苺畑にゐる

(一碧樓)

●わたしの句の曼珠沙華から曼珠沙華の薺を見に來たりした

(鶴平)

●つばくらめがしろいはらを見せに來た

(同)

●けふのわたしのきものから蟻がしましうほどに働いた(同)

●労働者になりきれないで目刺を食ひ目刺の頭をすてた(椰子樹)

●菜の花畑の小道が畑と同じ土の色

(痴堂)

* * *

長頸子曰——あの辺の処が感情に馳つてみたやうに取られた

のは、僕の筆触の粗暴から來た処だろうと恐れ入りますね。今月のあなたは「純なる芸術論」と言はれるが、一体あなたは季題寸言

を、芸術品ではないと御覽ではないでせうか。僕は芸術品と思ふ、さうなるやうに育て、行かうとしてゐます。従つて、いくら論（になつてゐるかどうか、僕のもの）じたところで、結局無駄ではないかとさへ思ひますが……。

さて、俳句と寸言との味は、似てはをっても全く別です。俳句と寸言とが別物だから、本当は全く別な味ひなんです。アイウエオとカキクケコ、この相似た二行から受ける我等の感じさへ違ひます。七月一日、七月二日、二つ並べてやはり感じの問題になつたら明らかに違ひます。笑はないで下さい。僕はこんな処まで掘下げて行かないと我慢出来ないのです、尠くとも芸術上の事になると……。あなたの（十三行以下八行の）所論はどうも僕にはつきり解らないのです。しかしまさか曲水は俳句雑誌であるから俳句以外のものは一切中止した方がいゝ、といふやうな事は微塵も含まれてはゐないとは察しますが、どうもはつきりわからないのです。正しい意味では、俳句の味は寸言では出せないのです。同時に寸言の味は俳句で出せません。で、あなたの断言は御返却致します、御受取が願ひたいのです。要するに、「俳句に専念なれ云々」があなたの主張と思ひます。けれども、句作者として一生を託する人ならば、それも出来ませうが、さうでない人、一般俳人には少し無理のやうです。やはり自然に、俳句以外のものも人に依つては出てしまふんです。これはどうする事も出来ないのです。俳句の下十二字が出来て、上五字がどうしても出来ません。それでも我々はそれを捨て得ないで、いつまでもノートの片隅に書いて置きはしませんか、二年も三年も未成品でも我々は一つの喜びを持つて保存します。よし寸言がさうした未成品であつても、それを育てやうとするのは結構ではありませんか。また、俳句にのみ専念にならないでも、季題寸言の作者

達は、俳句にのみ専念に携つてゐる他の曲水社友諸君の誰よりも、俳句に怠けてゐるとも、俳句が拙いとも思はれないやうです。（僕は、昨年から少し詩に就て考へてゐるので、何だか俳句について俳人が忘れてゐるものがあるやうな気が頻りにしてゐます。これが解るまで、時々作つていますが、結局怠けています。安心して怠けてゐるのです。念の為。）

最後に、お示しの諸氏の作品、残念ながら僕には寸言と似て全く別だとしかとれませんでした。全部がとれませんでした。少し愕きました。強いて似てゐる点を申せば、字数だけが寸言のあるものに似てゐるだけで、それと、最初の一つが、僅かに少し考へられました。が、寸言ならばこの場合、せめて「今日も」位の文字を上につけます。せめてそれで作者の感情を、もの一字で、作品の中へ吹込みます。兎に角、御指示の全部、寸言として投ぜられたものだったら、没です。寸言としては表現がまるで別物です。内容はどんなものでも、表現がなつてゐなくつてはつまりません。大理石の彫刻でも、それは一つの大理石塊にすぎません。

季題寸言

（曲水改卷9-1）

地震の夜が来た。安じられる弟の帰りを待ちながら、椅子の上の父と、世相が変わるだらうと話した。楓に吊るした提灯の明りどうどんを煮出して食べた。

（秋の夜）

地震の夜、更けて日本橋の勤め先から、藁草履を穿いて戻つて来た弟の話で、朝までには下町一帯が焼けてしまふさうだった。この秋の夜は、亡き東京の夢が多からう。

（秋）

地震の後の暴徒の騒ぎで、混乱の二日の夜が明けると、憎らしいほど明るい初秋の朝だった。とろ／＼と眠ったと思ふと裏の家の女の叫び声で眼がさめた。狂犬が川の中で暴れてゐるといふ。笑の虫がひよいと首を抬上げた。

(秋の朝)

「誰れ彼れ曰」

(曲水 9-12)

◇家も潰れず焼けもしないで、震災後直に逃出すやうに関西落ちを
行い、企てつゝある芸術家が尠くないさうだ。ある賢さに敬服する。
一方、壮語しつゝ踏止まる決心の人々もあるさうだ。悲鳴に似た勇
壮さにもまた敬服するが、多くの芸術家にとつて、離れたきは寧ろ
震災前の東京、止まりたきは震災後の東京ではなかつたか。兎に角、
新なる東京の建設に、真摯な芸術家に據つて黙々と据ゑられる礎の
一つ二つはありたいと思ふ。

◇この巨きな震災を胎として、若しも生れ出づるいゝ芸術があつた
なら、それは、悲劇でなくて恐らく喜劇であらう。深い悲劇を味は
して、しかも優れた喜劇、それが何故とはなしに待たれる気がする。

(曲水 9-14)

◇曲水を見る度、諸氏の名をいつも懐しみをもって拾ふ。入り代り
立代りの人々の中に創刊以来いつも不変の態度で不断に作句に親し
んでゐられるらしいのが、冷熱の烈しい自分を省るにつけ、まことに
床しい。

(曲水 9-17)

◇近頃改革をやつたホトトギスを見た。二百幾号あたりから暫く親
しんだ當時を思出しながら、何故か淋しかった。——日本橋の榛原
が老舗の看板を外して、此頃、丸ビルの中でメリヤスシャツを売り

ゴム人形を売り、更に自転車までも売るのが見た、それにもまして
うら淋しい氣持だった。

〔批評・主張・後記〕

曲水十一月号を読みて

(曲水 4-17)

諸家の近咏、雪鳥さんと三重吉氏の蕪村の句に就ての話は非常に
面白く拝見いたしました。殊に蕪村句解の方はいゝものと思ひます。
俳句は俳句ばかりでは解釈が難かしいもの、俳人だけで解釈してし
まふのでは充分でないといふやうな点を今更ながら深く考へます。
三重吉氏の葉書の文句。小生竊かに思ふにのあたりさすがに文章上
に惨憺たる苦心をした方だけあつて、一寸した言ひまはしにもいゝ
しれぬ味ひが溢れてゐて愉快に思ひます。

前田さんのペンキ塗り立て論はどんなものでせうか。いつかのホ
トトギスの余白にもあの句の推奨文があつたやうに思ひましたから、
今更愕きもしませんでした。これが我々にとつて、尠くとも前田
さんにとつては開拓すべき俳句の道の、何か天啓で、もあるやうに
言はれてあるのは少しどうかと思ひます。全文かなりに感激の文字
でつらねてあるのも少しあきたりません。尤も私にはまだあの句の
真髓を味はふだけの力がないゆゑかもしれませんが、とにかく、一
概に推奨し感服してしまふ先に、一通り句全体の品位といふやうな
点へも眼をとどかせて然るべきではありませんまいか、どうしても

「青蛙おのれもペンキ塗りにてか」といったのでは、堂々たる俳句
としての品位はないやうで、所詮短冊ものではないやうに考へます。
ペンキ塗り立てかと言つただけでは、どうしても奇抜な言ひ廻し、
思ひつき、でなければ、どんなものだと思つてつけたか、何処かにそ

んな気がしてなりません。作者の我鬼といふ人は新進の小説家、専ら皮肉を以つて鳴つた覇氣満々の人のやうに聞いてをります。前田さんの文を読んだら、我鬼先生、定めし、ニヤリと皮肉な微笑を惜まないと思ひます。「歩けく繩紙屑も我も月」、つまらない議論に停滞してゐたり、僅か一句の廻りをぐるぐる廻つてゐたりしては遅れてしまひます。どんく歩くに限ると思ひます。(中略)

趣味欄が折角の欄ながら、どうもあまり振はないのは遺憾に存じます。此頃のやうに、私は何が好きだ、私はかういふものを大切に持つてをる、といふやうな記述では更に趣味欄ではないやうに思ひます。(中略)これと、季題寸言も、聊か真髓からはなれて、絳景文の一片になりか、つて来たやうな気がいたします。これも残念に思ひます。(中略)季題寸言はむしろ俳句を作る以上にむづかしいものですから、やたらにやられてはたまりません。一寸してすぐ出来るものと思はれても大事です。文章としての季題寸言の味ひは、茶べりの四畳半裡、錦手ならざる茶碗の底に油のごとくしたみ落す数滴の茶の味と等しいものと思ひます。食後の番茶のやうにさうがぶがぶと飲めるものでもなし、亦飲むものでもないと思ひます。

(下略)

(十一月六日)

賀宴の卓

(曲水718)

夕立のあとの夜は八時、源氏香なりの食卓にスープがなかば済んだ頃——話し初めるに、時分——麦酒のほてりに輝いて、楽しい歓語が渡りそめた。近頃珍らしい顔合せなので、随分いろんな方が寄つたけれども、みんな軽いがくしい心地に溶けあつて、皿をついたり、洋蓋をあげたり、食卓の草花越しに笑つたり、時々主賓の辺りに眼をやつたり、同じ心に寛ろいでしまつた。

合間くは卓僮がつないで、皿が手早く代つていった。外は不忍の池の空に、火花が揚つたり、火が流れたり、何時までも夜は浅かつた。就中、主賓の辺りには、和やかな笑ひを鳴雪翁の声が縫つて、灯影は何時も宵だつた。

デザートの皿が並ぶ頃、卓の端から白水郎氏が起つた。そして何日もの歯ぎれのい、口調で、「忽卒の間に運んだ会で、当事者の不慣れ、手落ちも尠くなく、粗末の宴にも関らず……」と、会の由来と臨席者への謝辞を叙べ、「然し」と続け、「拝見いたします処、今夜の宴は現俳壇の絵巻物そのもの」と、巧みに結んで、発起者の挨拶を叙べた。

榮堂氏が續いて立つた。明快な軽い揶揄を交ちへて発起者の一人としての辞を述べ、句帖を讀し、「第三者として見るところ、近頃俳壇には、つまらぬいさかみや、揚足取りが間々あるが、そんな事は、一切止して、打寛ろいで進みたい」云々と席に復した。

「自分は既に俳壇の者ではないが」と、弧軒氏が起つ。「いまこの水巴句帖を見ると、今更ながら水巴氏が、二十年来俳句に精進された不斷の努力を思ひ、羨ましくさへ考へる」

鳴雪翁が背高く起つた。

「私が先づ失礼するから、どうぞ御自由に」と、洋蓋の酒をごくりと干して、今宵の宴の発起者の労をねぎらひ、「さて、かく祝賀の宴に當つて思ふに、水巴君は生来我儘のきく家庭に育つたために、非常に我儘者であり、疍癩持であり、きかぬ氣の男であり……」と、古き頃よりの思出に耽る心に、「それが為か、長らく君と仕事を共にした者でも、或ひは別れ去つた者がなくてもなかつた。しかし、猶且つ、何時も、君の廻りには君の仕事を共に分ち助くる者が尠くなく、従つて君の仕事は着々とその進む処に向つて進みつ、あ

り、かゝる会を催す折には、かくの如く、多数の方がお集まり下さって、共にこの句帖の出版を喜んで下さる。これを思へば、我儘者であり疍癩持である水巴君には、他に何かい、ものを持つてゐるに違ひない……」云々と、賑かな拍手を呼んだ。主賓の第一句集「水巴句集」に、「分けし根の菊に昔の心かな」の賛をされた鳴雪翁、今宵の翁はさぞ満足に在さう。

鳴雪翁の前から楽天氏が起つ。氏の音声は少しく低く、殊に我等には後ろ向の位置であつたので、充分聴取れぬのは残念ながら、時折、「句帖の序文を見るに、水巴君はなか／＼新しい人である」「今夕の会は、かゝる方面の水巴君には、却つてふさはしいものである」などと聞こえて来た。

続いて起つたのは、文壇の人万太郎氏である。

「わたくしはもう、今晚この席へ連なりましては、丁度、放蕩息子が久しぶり、家に帰つたやうな心持でございます。今晚は、ただ黙つて、みなさんのお話を聞いて、その心持ちでやりたいのでございませ……」と、感慨の口調で、坐に復す。

高浜先生が起られた。が、その頃は、先生が鎌倉への汽車の時刻も迫つてゐた、め、たゞ簡単に今宵の宴を祝し、「依つて、今は、水巴君の感想を聴きたく思ふ」と、主賓を促す。

主賓がすつくと起られた。満堂の視野の中に、主賓らしい挨拶がある。

玩亭氏が、「門弟として……」と起つた。すでに氏の顔は、酔と喜びに赤かつた。「水巴句帖の出版された事は、私共にとつては、実に太陽が昇つた思ひがあります」と、我等の心を代つて述べた。

弧軒氏が再び起ち、みんな席を起つて、主賓の為に乾盃した。宴は果て、も、まだ夜はなか／＼に浅い心持、別室に移つて、食卓を

囲んで話すもの、露台の夜風に笑ふ者、同じ心が和んでゐた。

印象ありのま、

- 何ともいへない親しみや気安さが、隅々までたゞよつてゐたこと。
- 主賓の挨拶が、減法うひ／＼しかつたこと。
- 鳴雪翁が、随分喜ばしさうに居られたこと。
- ま、ごとみたいに、小さな猪口をさしつけて、大嫌ひな「まあ一杯」「まあ一杯」をやられなかつたこと。
- 假善請のせいでもあらうが、会場の天井や柱が、ひどく安っぽく、楣間の巨大な額がつまらないものだったこと。
- 万太郎さんの演説が、朗読みたいで、ほんとに感慨無量であらうと思へたこと。
- 匏瓜さんが、何時見ても、ちつとも変らない容子でホカホカ歩いてゐたこと。
- 零餘子さんが見えたことは、いろ／＼な意味で自分だけには感謝されたこと。
- 高浜先生が、一足先にお帰りがけ、玄関でボーイから、丸まつちい大きな風呂敷包を受取つて無雑作に抱へなかつた時、「十五代將軍」の中の大靴の処を思出して、何だか胸が逼つてしまつたこと。

※ ※ ※

編集後記

(曲水7-8)

○ 「水巴句帖の会」が果て、夜風の露台の卓を四五人囲んだ時、先生から、「大変遅れたが、曲水句帖は今夜清書を済まして明日は印刷所へ廻す。十七頁までだから、後は、あなたの手許の原稿を纏めて廻してくれ」と、言はれた。自分は翌日纏めてしまふつもりでゐた。

○ 翌る日は、「水巴句帖の会」の盛会を偲ふてついうか／＼と過してしまった。夜、郷里の父が上京して来た。兄弟三人の自炊で、弟が一人休暇で帰国した後なので、かなり面喰った。二十日の夜更け、家の前に車の止まる気配に出て見ると、摩山水君が吟社からの帰路、残りの原稿と先生の手紙を持って寄ってくれたのだった。摩山水君は神経痛で息も出来ないと蒼い顔をしてゐた。自分は大変すまなく思った。

○ この春以来患ひがちの胃腸がまた悪くなりだした。加ふるに齒痛で頬や顎が順々に醜く脹出した。その間々に、絵をやる友人が来て、肖像を始めたので、時々坐らせられた。

○ 月初めに約束して、月末までに纏める筈の自分の仕事は、まだ半分しか出来ない自分は、いろ／＼考へて、暑い日中をぼんやりしてしまった。今月の遅刊は罪自分にある。(七月廿九日)

編集後記「いろいろな事」

(海国少年10-6)

○ 本号が六月号ですから、昨年本誌が復活してから丁度これ一年になります。この時に當って満天下愛読者諸君に深い感謝を捧げたく存じます。しかし物事は得て繰返され勝ちのもので、本誌にも亦どんな変化が来、まいとも解りません。けれども私達はその都度必ず読者諸君の御満足を得ますやう全身の努力を致します決心でありますことを、今後とも何卒御記憶下さいませ。

○ 本号の海国少年団生駒便乗旅行記は、あの旅行に本社からは誰も参加しませんでしたから、従つて本誌記者の手でなく、少年団の方の何誰かの手になつたものであります。

○ 近頃本法に冒險的の読物が少なくなつたといふやうなお手紙を寄せられる方が折々ありますが、それは、よし地味であつても確かり落ついた読物の中に、諸君のほんたうの心持にぴたり合ふものがあると深く信じました私達の考へからでございます。何卒大袈裟なばかりで空虚な読物を棄て、落ちついた健全な読物をお撮り下さい。この中にほんとうの勇ましさも、雄々しさもある筈でございます。じつと御覧下さい、牡丹の花の美しさも、小さな一本の草花の美しさも、結局変りはないではありませんか。いや、私達の心持は却つて、名もない草花の一つに牽かれさへ致します。(順風)